注目を集めるフランスの酪農乳業

ワールドデーリーサミット 2024 の開催国フランスを紹介する IDF ウェビナーから

国際酪農連盟（IDF）は、今年のワールドデーリーサミットを開催するフランスの酪農乳業を紹介するためのウェビナーを 5 月に開催した。その模様は、IDF の YouTube チャンネルでも公開されている。ウェビナーの講演では、フランス全国酪農経済センター（CNIEL）・経済見通し部長のブノワ・ルワイエ氏が、フランスの酪農乳業の直近の情況について、「生乳生産量は、牛は減少しているが羊や山羊では増加していること」、「付加価値製品では原産地呼称保護（PDO）の乳製品は好調であるが、有機の牛乳乳製品は安価な選択肢の増加やインフレの影響もあり低調であること」、「乳業会社ではフランスを本拠とする企業が世界的に事業を展開していること」、「家庭消費では飲用牛乳やヨーグルトよりもチーズ、クリームやバターが堅調であること」、と共に CNIEL を始めとする酪農乳業の専門職業間連合組織（酪農家及び乳業者らによる協働組織・ミルクサプライチェーンの業際組織）の役割や業界全体として直面している課題などをわかりやすく紹介した。本稿では、ウェビナーの講演内容を中心に、関連情報も取り上げる。

国際酪農連盟（IDF）がウェビナーを開催

IDF は、今年 10 月にワールドデーリーサミットを開催するフランスを紹介するためのウェビナー「フランスに焦点を当てた世界の酪農情況」を 5 月に開催した。その模様は、IDF の YouTube チャンネルで現在も公開されている（*1）。

英国の乳業誌デーリー・インダストリーズは、ホームページの編集者ブログ（*2）で、このウェビナーへの感想として、講演で紹介された酪農乳業の最新の動向を確かめるためにも近くフランスを訪れる予定であることや、フランスを本拠とする乳業会社の世界的な存在感について語り、「注目されるフランス」と題して発信した。

2024 年は世界的に選挙の年となり、フランスでは 7 月に議会選挙が行われた。パリで 7 月下旬から 9 月上旬にかけてオリンピック・パラリンピックが開催されている。そして 10 月にパリで開催される IDF ワールドデーリーサミット 2024 では、日本からも情報を発信し、世界各国の酪農乳業関係者らと情報を共有して交流を深めることとなっている。

フランスは、この 10 年間でも、2014～2016 年の EU の酪農危機、2015 年の EU の生乳クオータ制度の廃止、2018 年のエガリム法の制定、2019 年以降の新型コロナ禍、2022 年以降のウクライナ紛争など、様々な状況に遭遇してきた。農業大国であるフランスの酪農乳業の政策・制度や取り組みは、日本でもとても注目され参考にされている（*3～14）。

講演「フランスの酪農乳業」

ブノワ・ルワイエ氏（全国酪農経済センター（CNIEL）・経済見通し部長）

ワールドデーリーサミットを主催するいずれの国もがそうであるように、フランスは自らを酪農国であると考えており、そのことを強く意識しています。

・酪農の畜種および地域の多様性

フランスはその多様性ゆえに、非常に特別な酪農国であると言えます。多様性は、生乳生産において 3 つの異なる畜種が果たす重要な役割にも表れています。フランスは EU 第 2 位の牛乳生産国であり、EU 全体の 16％を占めています。地中海に面した国であるため、小型反芻動物の

生乳生産にも大きく関与しています。フランスはEU で 4 番目の羊乳生産国です。そして、山羊乳生産では世界第 1 位であり、EU 全体の山羊乳の 30%を占めています(表)。

表. フランスの主な畜種の生乳生産量(2023 年)とEU 内の順位

	牛	羊	山羊
生乳生産量	2271.5 万キロリットル	29.1 万キロリットル	59.4 万キロリットル
EU 内の順位と割合	第 2 位 16%	第 4 位 14%	第 1 位 30%

出展:講演資料(データは CNIEL、Eurostat、FranceAgriMer)をもとに J ミルク作成

生乳生産量の推移は、畜種によって大きく異なります。2015 年以降、フランスの牛乳生産は 8%減少しています。この動きは、2015～2023 年の期間に 6%の増加を達成した EU 全体の傾向とは、全く逆になっています。一方、フランスの山羊と羊の生乳生産は好調で、2015 年以降、それぞれ 12%と 11%増加しています。

生乳生産の盛んな地域は、全国的に一様ではなく、畜種によっても異なります。牛乳はフランスのほぼ全ての地域で生産されており、ペイ・ド・ラ・ロワール、ブルターニュ、ノルマンディーなどの西部の地域圏で盛んです。羊乳の生産はオクシタニー地域圏で盛んで、国内生産量の 4 分の 3 を占め、この地域にはロックフォールチーズの有名な生産地があります。山羊乳の生産は、主に西部と中部ヌーヴェル＝アキテーヌ、ペイ・ド・ラ・ロワール、オクシタニー、サントル＝ヴァル・ド・ロワールなどの地域圏で行われています。

・家族経営による酪農生産

生産は家族経営によるもので、国内に牛乳を生産する酪農家が 4 万 6000 戸あります。1000 頭以上を飼育している酪農家はありません。フランスの酪農場は平均すると、110 ヘクタールの土地で 70 頭の牛を飼育し、従事者 2 人で年間約 500 キロリットルの生乳を生産しています。

・原産地呼称保護(PDO)の乳製品は好調

フランスの酪農乳業界の大きな特徴の一つは、ほとんどの地域も関係している PDO(原産地呼称保護)乳製品の重要性です。PDO 乳製品は 51 種類あり、主に生乳から作られる 46 種類のチーズ、3 種類のバター、2 種類のクリームがあります。PDO 乳製品製造向けの生乳は、牛乳の生産量全体の 12%、山羊乳の 40%、羊乳の 36%を占めています。

そして、PDO 乳製品の生産において乳業の役割が増しています。特に、牛乳ではそうです。ここ数年、牛乳の生乳生産量が減少しているにもかかわらず、PDO 乳製品製造向けの牛乳は年間約 30 億リットルにまで増加しています。

図. フランスの地域圏(海外地域圏をのぞく)

・有機の牛乳乳製品はインフレの影響もあり低調

有機の生乳生産は、西部のペイ・ド・ラ・ロワール地域圏とブルターニュ地域圏で盛んであり、全国にも広がっています。有機は牛の生乳生産量の 5%強を占めています。有機の牛乳乳製品の販売は、残念ながら数年前ほど好調ではありません。その製造量は、2018～2020 年の時期には

2 桁の成長を示しましたが、ここ数年は減少しています。こうした成長トレンドの反転は、国内の有機食品の小売市場が劇的に崩壊したことの影響によります。実際、2021 年以降、有機の牛乳乳製品の国内市場は縮小しています。

有機の牛乳乳製品は、いくつかのマイナス要因に直面しています。その 1 つ目は、有機の乳製品に比べて安価でありながら、消費者の期待に応える自然でエシカル（倫理的）な製品の提供が増えていることです。新型コロナの世界的流行による最初の都市封鎖があって以降、地域性のある製品が特に評価されています。2 つ目のマイナス要因として、過去 3 年間、ハイパーインフレの状況によって、消費者が従来からの牛乳乳製品を選択するようになった状況があります。

・山岳地帯での生乳生産

フランスの酪農業のもう一つの大きな特徴は、山岳地帯での生乳生産の重要性です。フランスに 5 つある連峰の山岳地帯では、牛を飼育する 1 万を超える酪農場があり、国内の牛の生乳生産の約 20%を占めています。羊の酪農では、さらに印象的な数字があり、国内の羊の生乳の 90%以上は山岳地帯で生産されています。

・フランスを本拠とする乳業会社

フランスの乳業界の構造も非常に多様化しています。世界トップ 30 には、フランスの企業グループの 5 社が入っています。ラクタリス社は約 320 億米ドルの売上高を誇る世界第 1 位の乳業会社であり、ダノン社は売上高が世界第 5 位で、フレッシュ乳製品では世界首位のメーカーでもあります。これらの世界規模の乳業会社に加えて、中規模の企業グループも多く、1 億米ドルを超える売上高を生み出す企業が 20 社を超えます。

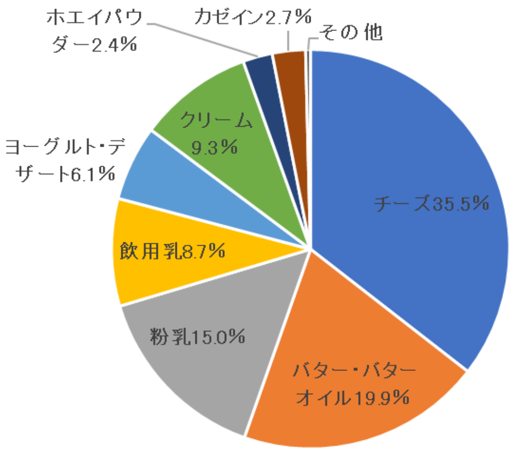
フランスの乳業会社のトップ企業、特にダノン社とラクタリス社は、強力な国際的な企業活動を特徴としています。それらの 2 社ほどではありませんが、サベンシア社も国際的に活動しています。結果として、フランスの乳業会社はフランス国内よりも海外でより多くの生乳を処理加工しています。最も国際化されたグループの一つであるネスレ社があるスイスを除けば、フランスはこのような状況にある世界で唯一の国です。そして、フランスの乳業会社の国際進出は、政府や業界による確立された政策によって起こったのではなく、それぞれの乳業者の個別の戦略によって、結果的に進んできたのです。

第二次世界大戦直前のベル社から始まり、その直後にダノン社が続きました。ソディアル社は 55 年前にヨープレイトブランドのフランチャイズを海外で開始し、サベンシア社は 1970 年代半ばにブラジルに上陸しました。ラクタリス社は 1980 年代初頭に米国に投資を行い、国際化を開始し、それ以降に追いついてきました。ラクタリス社は、全部で 50 カ国以上に工場があります。

・乳製品の生産と貿易

フランスの乳業の活動は、利用可能な乳固形分の 55%以上が向けられるチーズやバターの製造を中心に行われています。さらに見ていくと、これらの仕向け先は国内の消費パターンに従っており、飲用乳はさほど多くなく、バターとチーズの割合は特に高い水準を示しています（図）。

図. 乳製品製造の内訳（2023 年、乳固形分換算）



出展：講演資料（データは CNIEL）をもとに J ミルク作成

フランスの乳業は、国外市場に対して非常に開放的です。フランスで生産された生乳のほぼ40%が輸出に向けられ、約60%は国内市場にとどまっています。輸入も重要であり、国内消費の3分の1を占めています。そして、フランスの乳業は、2023年に生乳生産の8%に相当する190万キロリットルの小幅な余剰を示しました。

フランスの乳製品の対外貿易収支はプラスですが、ここ数年減少しています。輸出は増加していますが、輸入はさらに増加しています。結果として、対外貿易収支の黒字は2014年の38億ユーロから、32 億ユーロにまで減少しています。フランスの乳製品輸出金額は約90億ユーロです。EU 以外の国のシェアは、2000 年の 36%から2023年には44%へと、過去20年間で増加しています。

フランスの乳業者の状況は、欧州域内の市場ではより複雑です。フランスはここ数年、市場シェアを落としています。

・牛乳乳製品の国内市場

一人当たりの牛乳乳製品消費量では、フランスの飲用乳は年間 42 リットルと、米国やインド、オーストラリアなどの国を大きく下回っており、世界で見るとむしろ一般的な水準です。一方で、バターとチーズの消費量は世界的に見ても非常に高い水準にあります。

フランスでは、新型コロナ禍が始まった当初、ほとんどの家庭で乳製品の購入が増加しましたが、現在は通常に戻っています。現在の市場動向は、新型コロナ禍以前に似ており、家庭では牛乳やヨーグルトよりも、チーズ、クリームやバターを多く食べています。

2020 年以降、フランスでは植物性製品の競争は低調であり、小売市場は成長していません。植物性飲料の市場は、販売量で飲用乳の市場の5%に相当し、植物性デザートの市場はヨーグルトとフレッシュ乳製品デザートの市場の 2%に相当しています。

・専門職業間連合組織の役割

フランスの酪農乳業界の組織化の特徴として、専門職業間組織(サプライチェーンの垂直的な業界団体(酪農家及び乳業者、小売業界の協働組織)であり業際組織ともいう)が主導的な役割を果たしていることが挙げられます。実際、1970年代半ば以降、フランスは、経済発展を促進するために、今日まで農業部門の組織化や管理を専門職業間組織に委ねています。

酪農乳業界には、いくつかの専門職業間組織があります。牛乳のための CNIEL(全国酪農経済(業際)センター:Centre National Inter-professionnel de l'Economie Laitière)だけでなく、山羊乳のための ANICAP(全国山羊専門業種協会)、羊乳のための FBL(フランス山羊乳(France Brebis Laitière):全国羊乳専門業種協会)、PDO 乳製品のための CNAOL(全国乳製品原産地呼称会議)などです。これらの業界連合組織の運営には、酪農家、酪農協同組合、乳業者などの民間企業、さらに CNIEL の場合は小売業者までもが参加しています。専門職業間組織の主な使命は、業界全体の共有ツールと基準・参照指標を作成し、牛乳乳製品だけでなく、酪農乳業界としての取引を共同で促進することです。

ANICAP と CNIEL では、組織の方針を各地域で実行する場合、地域支部を通じて促進しています。このような専門職業間組織の考え方は、フランス国内の生乳取引検査を担当する 14 の生乳検査機関にも反映されています。これらの機関は、酪農家と乳業者による共同運営が行われています。

・酪農乳業界が直面している課題

フランスの酪農乳業界は 5 つの課題に直面しています。1 つ目は、「責任と強靭性」の課題です。その中心的な問題は、環境への影響を減らし、気候変動に適応し、アニマルウェルフェアを

改善しながら、国内および国際的な食料安全保障をいかに確保していくのかということです。これは新しい課題ではありませんが、私たちには集団的な社会的責任への取り組みを加速させる必要があります。

3 つの戦略面の課題にも直面しています。それらは、酪農乳業界の「魅力化」、貿易・取引や価値を創造する能力に関するフランスの酪農乳業界の「競争力と経済発展」、そして、「食品の品質、手頃な価格、身近さ」に関する市民や消費者からの期待に応えることです。

5 つ目の課題は、業界全体での取り組み手法に関するものであり、酪農生産から、乳業による製造・販売、小売業のそれぞれの「多様性を認識して、より包摂的に」していく必要があります。

参考資料:

1) https://www.youtube.com/watch?v=x7oiGjMlH-c IDF Webinar World Dairy Situation Report with Focus on France（IDF ウェビナー「フランスに焦点を当てた世界の酪農情況」. 国際酪農連盟 YouTube チャンネル）
2) https://www.dairyindustries.com/blog/44661/the-french-in-focus/ The French in Focus. Blog. Dairy Industries.（注目されるフランス. ブログ. デーリー・インダストリーズ）
3) https://www.alic.go.jp/content/001226127.pdf フランスとオランダにおける酪農の最近の動向について. 畜産の情報. 2023 年 6 月号、第 69～80 頁. 農畜産業振興機構
4) https://www.maff.go.jp/primaff/kanko/project/attach/pdf/190300_30cr10_06.pdf 須田文明. フランス酪農部門-生産コストと契約化の展開-. 平成 30 年度 カントリーレポート:米国、カナダ、EU(条件不利地域における農業政策, 共通農業政策(CAP)の変遷における政治的要因等の検討、ドイツ、フランス、英国)、ロシア(プロジェクト研究［主要国農業戦略横断・総合］研究資料 第 10 号). 第 1～22 頁. 2019 年. 農林水産政策研究所.
5) https://www.maff.go.jp/primaff/kanko/project/attach/pdf/200331_R01cr01_03.pdf 須田文明. フランス山岳地酪農における高付加価値化の条件-AOP チーズ, カンタルとコンテの比較から-. 令和元年度カントリーレポート:米国、EU(CAP)、フランス、英国、CETA、ロシア(プロジェクト研究［主要国農業政策・貿易政策］研究資料 第 1 号). 第 1～20 頁. 2020 年. 農林水産政策研究所.
6) https://www.jstage.jst.go.jp/article/nomonken/50/2/50_10/_pdf/-char/ja 石井圭一. EU 酪農自由化下のフランスの政策対応と農業構造. 農業問題研究. 第 50 巻第 2 号. 第 10～18 頁. 2019 年
7) https://www.chiikinouken.or.jp/zousyosearch/data/kaiho-736-0129-0004.pdf 石井圭一. フランスのエガリム「食料三部会」法の背景と経緯. 地域と農業. 第 129 号. 第 28～35 頁. 2023 年 4 月. 北海道地域農業研究所
8) https://www.nochuri.co.jp/genba/pdf/otr20230703.pdf 小田志保. フランスの乳価形成におけるエガリム II 法の影響-フランスソディアール酪農協取締役フレデリック・ショソン FRÉDÉRIC CHAUSSON 氏に聞く制度運用の実態-. 随時発信レポート. 2023 年 7 月. 農林中金総合研究所
9) https://www.jstage.jst.go.jp/article/jfsr/30/2/30_01/_pdf/-char/ja 新山陽子、杉中淳、大住あづさ、吉松亨. フランス Egalim 法、Egalim II 法にみる生産コストを考慮した価格形成-法にみる仕組み、実施に向けた議論、日本の課題-. フードシステム研究. 第 30 巻 2 号. 第 37～52 頁. 2023 年
10) https://www.alic.go.jp/content/001239325.pd

f 畜産物の生産コストを価格に反映する仕組みを考える. 新山陽子. 畜産の情報. 2024 年 3 月号、第 2～4 頁. 農畜産業振興機構

11) https://www.jstage.jst.go.jp/article/jfsr/20/4/20_386/_pdf 新山陽子、高鳥毛敏雄、関根佳恵、河村律子、清原昭子. フランス、オランダの農業・食品分野の専門職業組織-設立根拠法と組織の役割、職員の専門性-. フードシステム研究. 第 20 巻 4 号. 第 386～403 頁. 2014 年

12) https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhej/66/6/66_290/_pdf/-char/ja 大森桂、金子佳代子. フランスにおける教育ファームの現状. 日本家政学会誌. 第 66 巻 6 号. 第 290～298 頁. 2015 年

13) https://www.nyukyou.jp/asset/pdf/action/202002_france_final.pdf フランスにおける牛乳乳製品の市場調査及び日本産乳製品に関する調査・最終報告書. 2020 年 2 月. 日本乳業協会.

14) https://www.tastefrance.com/jp/chisu Cheese. Taste France Magazine. (チーズ. テイスト・フランス・マガジン)

(資料閲覧:2024 年 6～7 月)

(担当:Jミルク 国際グループ 新 光一郎)